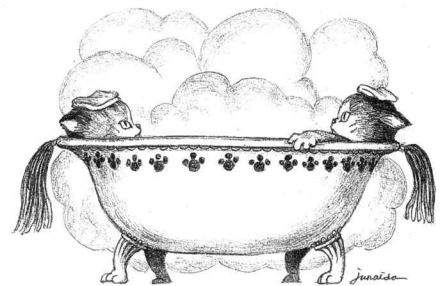


朝日 俳壇



〈日曜日のプローチ 32〉 junaida

川野里子選

サージカルキャップはすせばシャンブーの香
り目覚めるように日常（八王子市）松井 りん
認知症患者が眠ります ついにわたしも敵
のようです（羽曳野市）谷 みゆき
角館城主の先祖を追ひやりし佐竹氏が来る郵
便持って（五所川原市）戸沢大二郎
熊は何故いつも駆くるや自らの余命を知りて
生き急ぐこと（船橋市）佐々木美彌子
どの風も金魚の匂い金魚田の駅に新聞はらり
と広ぐ（大和郡山形市）四方 護
無精卵抱き続ける文鳥の舌の指噛む嘴強し
（合志市）岩下 早織
退勤のタイムカードに刻まれる地層の如き時
間の断面（君津市）八号坂唯一
真夜中に木彫りの熊が動きそう怖い怖いとお
ののく今年（伊賀市）福沢 義男
味噌汁にきのこ山ほど入れて煮て秋だ秋だと
夫を起しぬ（佐世保市）近藤 福代
陽を返すメガソーラーの大斜面滑り去りゆく
尻のあり（村上市）鈴木 正芳

【評】一首目、手術室の緊張から解放へ、嗅覚が鮮やかに働いている。二首目、認知症の母も介護する家族と共に孤独を極める辛い瞬間だ。三首目、遠い昔の政敵が今は馴染みの顔。七首目、カードに積み重なる時間、これが自分の生活の地層だ。

佐佐木幸綱選

☆いくたびも禁煙喫煙繰り返し夫の遺品のライ
ター三つ（茨木市）窪田 宣子
重そうなのうちは語らずに冗談残し息子は
帰る（千葉市）鈴木 一成
父になる父を知らない息子たち肩車の子多く
の幸あれ（たつの市）福井 昭子
阪神の日本一が拝めずに私は雨の庭を見て
る（枚方市）久保 哲也
うるさいと誰も言わねどうるさくて図書室巡
る熊除けの鈴（安中市）岡本千恵子
年老いて重荷になると友と離れだ田畑担い
手もなく（松阪市）小野多美子
半世紀ぶりに手にするマンドリン昭和歌謡の
トレモロ嬢し（三原市）池田 桂子
傘の字になったみたいに二組の親子で入る一
本の傘（横浜市）前沢 空
ケータイはあるが殆ど使わねいたまに鳴つて
る神棚の上（横浜市）高野 茂
咲くやがて石にこぼる白萩の閑かな径の白
毫ゆめく（箕面市）大野美恵子

【評】第一首、「いくたびも禁煙喫煙繰り返し」には思い当たる人も多いのではなかろうか。私も四十代までヘビースモーカーだった。第二首、久しぶりに帰省した息子さんなのだろう。親の方も問いつめたりしなかったのだ。

高野公彦選

文化の日眉間の皺も柔らかく世界の王さん文
化勲章（東京都）尾張 英治
親子グマ微笑ましくも見てしまふクマ警報の
土地に住み居て（札幌市）西原 由佳
戦後なる子等ひもじくて驚いた柿の実をい
ま熊の食る（下野市）若島 安子
知己の死に立ち合つたに減りゆくはわが来
し方の貴き彩り（千曲市）米沢 光人
さよならと舞ひさよならと降る木の葉散りゆ
くものが秋を深くす（福島市）美原 凍子
「散髪をしたの？」と問う妻三日間わたしたは
透明人間だった（観音寺市）篠原 俊則
プーチンを説得できぬトランプを平和賞推薦
する新首相（神戸市）安川 修司
☆いくたびも禁煙喫煙繰り返し夫の遺品のライ
ター三つ（茨木市）窪田 宣子
今年また秋は東の間東京に木枯らし一号吹き
荒れて冬（横浜市）島巡 陽一
伊那谷のたんばく源がいま珍珠峰の子 稲
子、ザザムシ、タニシ（長野県）御子柴妙子

【評】1首目、王貞治さんの受章を喜ぶ心。2首目と3首目、人々を困らせている熊だが、責めるだけでは可哀そう、の気持ち。4首目、自分の人生は幾人もの友ありてこそ貴重な彩りを与えられていたのだ、と感謝し、友らの死を悼む歌。

永田和宏選

由伸由伸と親戚のおばちゃんのようにしや
ぐ私ほか数名（福島市）横山ひろこ
ハロウィーンの渋谷で老人四人組逃亡者のご
とく蕎麦屋に潜む（横浜市）森 秀人
湧き返るベンチの中でただ一人投手静かにデ
ータ読みをり（神戸市）喜多 清
「俺に花が似合うか考えて贈れよ」照れて喜
ぶ退職の上司（東京都）上田 結香
さびしさはあなたとふたりはんぶんこ月は上
弦あきのゆうぐれ（新潟市）太田千鶴子
銀色のすすきの波が藍色に変わって明日は里
も初雪（五所川原市）戸沢大二郎
娘待つ私のように母もまた私行く日待って
いるかと（吹田市）有川ゆう子
柿渋を洗ひ流して仕上げ砥に当て休ませる二
本のナイフ（瑞穂市）渡部 芳郎
水鳥を浮かべた風ぐ鳩の海いま夕日の没り
ゆくところ（東大阪市）池中 健一
もう使うこともなければどきだしの片隅にあ
り日食グラス（藤枝市）菊川香保里

【評】一、二首目、ドジャース優勝に沸き立つおばちゃんたちと、ハロウィーンの若者たちから逃れてひっそり蕎麦を喰う老人四人組。三首目も山本由伸だろうが、そこだけ空気が引き締まったような空間。四首目は上司の顔がありありと見える。

短歌時評 現実を暗喩する言葉

山崎 聡子

世界で起る戦争・紛争について、歌人は「見る者」である自分を詠んできたように思う。「テレビを見て書いたような」という批判が成り立つ一方、どの位相から詠むか、様々な試みがなされてきた。そして現在、ウクライナやガザの惨禍を前にし、バックラッシュや排外主義が雪崩れ込むなかで、これらを自分の内面と結びつけて扱う短歌が生まれている。オッペンハイマーの気持ちは鮮明にわかるに決まってる、歌人だから

平岡直子ノ「外出」十一号
「戦争、戦争、戦争、戦争」を塗る
同ノ「歌壇」二〇二五年十一月号
一首目は連作「戦争のことを考えるに」は戦争のように考えるしかない一から。オッペンハイマーは原爆の開発を指揮した物理学者で、映画「オッペンハイマー」では、彼が信じた物理学と倫理との相剋が描かれた。一首全体が放言のようである一方、物理学であれ、詩歌であ

れ、信仰心が容易に暴力に転化する可能性を自覚的にみつめている。次の歌では、「ファンデーションを塗る」という語の執拗な反復によって示される。もう顔がみずたまりだから照り輝るテレビは「映像の世紀」しか観ない目の奥に痛みはきざす目の奥の画紙が死者に触れようとして 大森静佳ノ同大森の歌でも、20世紀の歴史を振り返る記録映像を背景に、繰り返されてきた人間の歴史が現実を侵食する。いずれも、私たちが暴力を駆動させる社会の一部であることを思い起こさせる。（歌人）

第40回俳壇賞 福岡県春日市の馬場公江さん(60)の「ゆらゆら」(30句)に決まった。本阿弥書店の「俳壇」誌の新人賞にあたる。「角川 季節別俳句集成」春、夏、秋、冬、新年の5分冊で、合わせて約3500人の俳人の秀句6万6千句余を収録。松尾芭蕉の全句を収載。無季俳句と自由律俳句を「新年」の巻に収めた。（角川書店・2090～2640円）

☆は共選作。入選作はデジタル版などに掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます（週1回25日までに）。QRコードから